一宮西高新聞

発行所
愛知県立一宮西高新聞部
一宮市萩原町串作河田1
電話一宮（68）1191
株式会社 大東社
電話一宮（62）1168

教科書取扱店
文泉堂書店
一宮市本町4の3の1
電話（71）2181

あなたもいつか裁判員！

来年5月から裁判員制度が始まる。最近、ニュースで取り上げられることも多くなった。今回はその「裁判員制度」について、各学年2クラスに協力していただいたアンケートに基づいて考える。

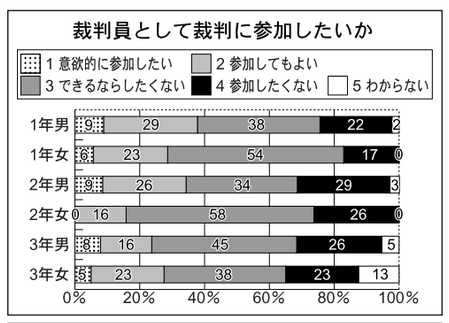
まず裁判員制度の簡単な説明をしたい。裁判員制度とは、くじで選ばれた有権者が、地元の地方裁判所で裁判員となり、事件の一審を担当する制度である。担当する事件は、殺人、強盗、誘拐、通貨偽造や銃の発射などの刑が重い罪の事件、または傷害致死、監禁致死や危険運転致死などで、故意の犯行によって被害者を死亡させた事件になる。

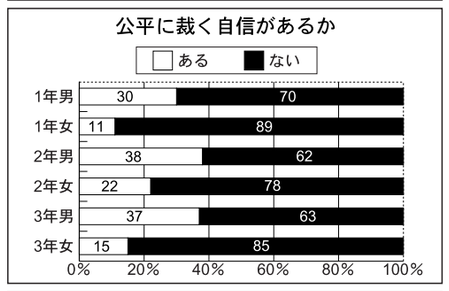
制度が導入される理由については、「国民が裁判に参加することによって、国民の視点、感覚が裁判の内容に反映される」、「裁判が身近になり、国民の司法に対する理解と信頼が深まる」、「国民が自分を取り巻く社会について考えることにつながり、より良い社会への第1歩となることが期待される」等である。

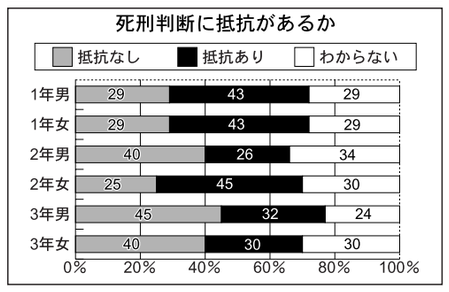
また、国民が裁判に参加する制度は、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、イタリアなど世界の国々で広く行われているという点も理由の1つである。

アンケート結果の分析に入りたい。「裁判員制度についてどれぐらい知っていますか。」の設問で2、3年生の女子は半分以上が「あまり知らない」か「全く知らない」という結果だった。また、「裁判員として裁判に参加したいですか」には、多くの人があまり参加したくはないと考えていた。特に2年の女子に「参加したくない」が多かった。制度が来年から始まり、数年も経てば自分たちもなっているのかもしれないのだから、もっと興味を持ってもいいはずである。意識の低さが気になる。制度を知っている者が多い学年は、参加してもよいと答えた人が多く、制度について知ることでより参加する意欲を持てるようになると考えられる。

裁判が行われる名古屋地方裁判所（HPから）







「公平に裁く自信あり」男子35％、女子16％

「裁判員になったら、ニュースや他人の意見に流されず、公平に裁く自信はありますか」では、男女差が表れた。多くの人は自信がないと答えたが、それでも「自信がある」と答えた男子は女子の2倍以上であった。全体的な自信がない理由としては、「法律の知識が少なく、公平に裁く自信がない」、「他人や情報に流されやすい」という人が多数いて「同情してしまう」と答えた人もいた。

このような不安は「裁判員になった場合、不安に思うことはありますか」の質問で、内容が具体的に浮かび上がった。3割の生徒が「間違った判断をして、無罪の人を有罪にしてしまわないか不安」であると答えた。次に「他人の意見に流されそうで不安」が2割、「被告人から逆恨みされないか」が2割弱と続いた。

自信がないから、無罪の人を有罪にしてしまわないか不安になるし、他人の意見に流されてしまうから、公平に裁くことはできないと考える。裁判に対する不安と公平に裁く自信は密接に関係しているのだろう。それがアンケートに素直に表れた。

不安に思う理由にはいろいろある。例えば、本職の裁判官でも判断を間違えて冤罪にすることもあるのに、素人ができるのか、事件の報道に流されないでいられるのか、などがある。不安が多いから公正な判断ができないというのも、もっともである。ただ、法律の知識がない人からの意見も裁判に取り入れたいということで始まる制度でもある。今までの判例が、世間の価値観からずれている部分があると思われたからこそ、この制度ができたのだ。

更に死刑かどうかの判断もしなければならないときがある。「裁判員になった場合。死刑の判断もしなければならない可能性がありますが、あなたは死刑判断に抵抗がありますか」では抵抗のある人もない人もおおよそ同数だった。低学年には男女差があり、男子はあまり抵抗がなく、女子は4割の人に抵抗があった。

理由では「自分が人殺しの気分になる」、「自分の判断で人が死ぬのは嫌」等が多かった。自分だけの意見で決まることでもないが、その判断が世間的に正しくても、後味が悪いものになるとの予想はつく。法律の知識のない私達が決めていいのかとも思う。死刑制度自体に反対する人もいるので、難しいところだ。

「裁判員制度は必要だと思いますか」には「分からない」と答えた人が多く6割くらいで、「必要だ」と答えたのは2割ぐらいであった。これは制度が始まっていないので「分からない」という答えが多くても仕方のないことである。「必要だ」の理由には「一般の人の意見を取り入れることができる」、「裁判官だけで判決が決まるのはおかしい」等があった。「必要ない」の理由には、「素人の判断には任せられない」等があった。

来年から裁判員制度が始まっても、自分たちが裁判員になるのはしばらく先のことである。それまでにも制度についてのニュースや特集があると思う。そういうものに注意を傾け、見たり、聞いたりして知識を増やしておき、裁判員になった場合に対する準備をしておきたい。

仮想ストーリー　裁判員になったボク

昨年12月、今年の「裁判員候補者名簿」に載ったという通知が届いた。私は24歳、会社に入って2年目、仕事にも慣れてきた頃だった。「調査票」も同封されていて、「裁判員になることができない人か」等についてマークシート方式で回答していった。回答を終えた私は、調査票を返信用封筒に入れ、返送した。裁判員になると日給で最高1万円もらえるので単純に悪くないなぁと思っていた。

そんな事などすっかり忘れていた私に、「裁判員等選任手続期日のお知らせ」と「質問票」が送られてきた。どうやら裁判員が担当する事件がもうすぐ始まるらしい。それで、裁判員候補に選ばれた。殺人事件だった。「お知らせ」をもらった人は裁判当日に裁判所に行かなくてはならない。質問票には「重い疾病または傷害により裁判所に行けない」「仕事で重要な用務があり、処理しなければ、著しい損害が生じる恐れがある」等の人に辞退を希望するかの確認であった。私はどれにも該当しなかったので、必要事項を記入して返送した。

選任手続きの当日、私は会社を休んで、裁判所へ行った。裁判所へ行くと、また質問票を書かされた。「この事件と深い関係があったり、報道によって知っていたりするか」等の質問だった。不公平な裁判をする恐れがある人を見分けるためである。回答を終えると、別室に1人で行った。そこには裁判官を始めとして10人近くもの人がいた。裁判長から今までの質問を参考にして、質問をされた。その後、くじで6人の裁判員が選ばれる。結果、私は選ばれた。選ばれなかった人々は、昼頃に帰っていた。

そして、初公判。行われたのは、起訴状朗読、罪状認否、検察側、弁護側それぞれの冒頭陳述、裁判員から被告人への質問が行われた。休憩を挟んでいたが、3時間かかった。中間評議を行い、そこで公判の不明な点を裁判官に質問した。他の裁判員も疲れるとか難しいと思っていて、そう思っているのが、自分だけでないことに安心した。

2日目は午前中から証人喚問があった。遺族の話や、被告の情状酌量を求める声を聞いても、判断が難しいと思った。だが、人を裁く立場にいると実感でき、真剣にならなくては、とも思った。午後は検察官と弁護人が意見の最終確認をした。被告には意見を述べる機会が与えられ、反省の言葉を述べた。

その後に最終評議。まずは有罪かどうか。全員一致が望ましいが、意見はまとまらず、多数決で決める「評決」になった。裁判員、裁判官それぞれ1人以上を含む過半数が有罪の場合のみ有罪になる。まとまると裁判官は判決文を作り、完成すると私達に読み上げ、確認をした。そして、法廷に行き、被告に判決を宣言した。

裁判が終わり、私は裁判に関する知識や関心も増えた。3日間であったが、非常によい体験だった。

論説　外国人労働者の受け入れを考える

現在日本には200万人を超える外国人が暮らし、そのうちの約半数100万人近くが労働者として働いている。そのことが、これからの日本社会にどのような影響をもたらすのだろうか。決して小さな影響ではないであろう。

少子高齢化がすすみ、日本は将来深刻な労働力不足が予想される。その対策として、外国人労働者の受け入れが急速にすすんでいる。これまでにも日系ブラジル人に限って永住権を与えて、日本で働くことを認めて受け入れている。さらに、介護士や看護士を目指す多数のインドネシア人の到着が、ニュースとなって大々的に報じられたことは記憶に新しい。

しかし、外国人労働者の受け入れはそれほど簡単なことであろうか。わが国が移民を承認するのかという大問題も含めて、さまざまな議論が沸き起こるであろう。外国人労働者の受け入れによって治安が悪化するのではないかと、受け入れに消極的な意見がある。現に、ブラジル人が多数居住する団地では、室外で飲食するブラジルの習慣による深夜の騒音とか、ゴミの分別をしないために起こるトラブルとかが問題になっている。反対に、労働力不足による国力の低下を防ぐためには、積極的に受け入れざるを得ないという考えもある。

私は、単純に受け入れの是非を言うだけではなく、国内の潜在的労働力、たとえば労働意欲のある高齢者や女性の雇用を積極的に進め、正規雇用に就かない、あるいは就けない若者に職を与えることをまず第一に考えるべきだと思う。

若者が、3K（きつい・汚い・危険）といわれる職種を嫌うようになったのはなぜであろうか。そういう職場がきつくて耐えられないというだけではなく、学歴重視という風潮、いい高校いい大学を出れば楽な生活が保証されるから勉強せよという親のことばが、こんなきつい仕事は日本人がやるべきことではないという思いを持たせる。そのため1つの仕事が長続きせず、すぐに諦めてしまう要因になっていると思う。その結果、日本を支えてきた製造業や、高齢化社会を支える介護の現場に若者が集まらなくなり、外国人労働者を雇うことになった。

外国人労働者を雇用する積極的理由は何であろう。一番大きな利点は、日本人とのやる気の違いである。外国からわざわざ日本に来るだけあって彼らは皆、大きな夢や希望を抱いている。国に残してきた家族のために頑張るという強い動機を持っている。それが強い勤労意欲を生み、雇用者にとって大きなメリットになっている。その一方で、大きな懸念もある。宗教上の理由で豚肉や牛肉が食べられない、1日に何度か礼拝をしなければならない、女性は必ずスカーフをつけねばならないなどという文化の違いを、われわれ日本人が容認できるか。

外国人労働者にどれだけの社会保障を与えるかについて、国民的合意が形成されるか。彼らの子供たちの教育はどうするのか。また、不法滞在によって働く外国人をどう取り扱うかなど、問題は山積みである。

その上、もう1つ大切なことは、彼らを送り出す側の国のことだ。たとえばフィリピンは、国外で30万人もの看護士が働いているが、自国の乳児の死亡率は日本の10倍であり、結核患者は60万人もいるという。看護士の海外流出で自国の看護が後回しにされているが、このような事態はフィリピンだけとは限らない。労働力を海外に送り出す国であっても、その国の労働力が必ずしも足りているわけではないことを知ることも重要だ。

近い将来、日本は外国から多数の労働者を受け入れることになるだろうが、同時に国内の高齢者や女性、若者の雇用についての方策も真剣に検討されなければならない。

私は、これから国際化がますます進展する中で、日本という国が日本人によっては支えられなくなるのではないかという不安を抱く。自分たちが嫌だと感じる仕事、重労働をすべて外国人に頼ってしまうということでよいのだろうか。食料の供給をあまりに外国頼みにしてきたために安全が脅かされているのと同様な事態が、あるいはもっと重大な事態が起こりはしないのだろうか。

後期生徒会役員決まる

後期生徒会役員が決まった。今回も立候補者がなく、全員議会選出という事態になった。

とはいうものの、後期の予餞会や球技大会の企画・運営などに頑張ってもらいたい。もちろん、私たちも協力を惜しまない。

新役員に、恒例のアンケートを行い、回答をいただいた。アンケートは、次の内容である。

1、趣味、特技
2、好きな芸能人
3、休日の過ごし方
4、もし願いが1つ叶うならば何をしますか
5、生徒会活動に対する抱負
6、立候補がなかったことをどう思いますか

会長・水谷香菜（2の2）
1、音楽　どこでもすぐ寝れる
2、モンスターエンジン
3、土曜日はほぼ部活。日曜日は思いつくままに動いてます
4、タイムマシンで平安時代に行きたい。下ぶくれ＝かっこいいなのか確かめたい
5、ハッキリ言って分からないことだらけですが、精一杯がんばります。よろしくお願いします！
6、私も最初から立候補した訳ではないですが、少し残念かなと思います

副会長・小島龍馬（2の2）
1、趣味はいろんな服屋をまわること。そして買うこと
特技はとくにないです
2、山本裕典
3、たいていはキ○オで服見てます
4、願える数を増やして後で思いついた事をいくつでも叶えてもらいます（笑）
5、自分みたいな頭も悪くて、経験もない奴が生徒会なんてできるのか正直不安ですが、自分のわずかばかりのスキルを総動員して少しでも学校の役に立てるように頑張ります
6、自分も立候補していないので何とも言えないですけど、やっぱ、みんな忙しいから仕方ないと思います

書記・大江彩乃（1の5）
1、趣味…100円ロッテ・マック食べながらハイテンションで語る！↑特技…なわとび《小学生のときのなわとび検定1級取得！笑》
2、HY、EXILE毎朝聴きながら登校してます♪
3、普段は友だちと遊んだり喋ったり踏んだりはねたりいです!!!↑あの小さくて愛らしくて憎らしい田中さんに♥笑
5、会長さん、副会長さん、会計さんと協力して予餞会を感動できるものにし、スポーツ大会でもみんなが一致団結して良い思い出になるものにしたいです。みなさん、楽しみにしていてくださいね!!!
6、残念に思いますが、西高の行事はみんなが楽しめて盛り上がれるようなものばかりなので、その行事の大部分に携われることはとてもいい思い出になると思います。ですから、〝面倒くさい〟と思わずに興味を持って積極的に立候補してください。高校生活が充実しますよ！

会計・田中奈々（1の7）
1、趣味…悪いってよく言われます。特技…髪型模写
2、若槻千夏、perfume、しょこたん、…
3、寝てるか動いてるか、です
4、書記の大江さんになりたいです!!!
5、わからないことばかりですが、足手まといにはならないようにしたいです。一生懸命に頑張ります
6、残念です。人のこと言えないけど、次は出てほしいと思います

小島君　水谷さん
大江さん　田中さん

▼最近よく「ワーキングプア」という言葉を耳にします。

ワーキングプア、直訳すると「働く貧者」です。ワーキングプアとは、「正社員並みに、あるいは正社員としてフルタイムで働いても、ギリギリの生活さえ維持が困難、もしくは生活保護の水準以下の収入しか得られない就労者の社会層のこと」です。これは発展途上国などではなく、成長した自由主義圏の先進国で多発している問題です。▼ワーキングプアが発生した原因として、企業費削減が指摘されています。企業は人件費を安く済ませるために、賃金水準を抑制し、安い人権費を目的とした海外への進出を図り、賃金の高い正社員の新規採用を減らし、賃金が安く、売上等状況に応じて調整を行いやすいアルバイトやパート、契約社員、派遣社員といった非正規社員を増やしてきました。▼そのため、新卒で就職できなかったり、正社員でも離職、倒産やリストラなどで職を失うと、特別な国家資格や経験、技量がある場合を除き、定職につくことは難しくなります。▼日本のワーキングプア解決の取り組みには、母子家庭の自立支援策として高等技能訓練促進費という資格補助制度があります。しかし、実態に即していない等の批判もあり、予算の執行割合も低いのが現状です。▼海外での取り組みの例を見ると、アメリカでは、最新バイオテクノロジーに関する授業を格安で低所得者に受けさせ、地域の安定した労働者に育て上げたり、イギリスでは若者に職業訓練を受けさせ、その期間中は生活費を支払い、就職できるまで見守る取り組みが行われています。▼非正規雇用は、正規雇用と補完し合い、柔軟性を高める効果を持つため、必要不可欠な存在と見なければいけないと思います。アルバイトもパートも契約社員も無い世の中になれば、かえって経済を縮小しかねないと思います。▼日本は、イギリスのような成功した例に学びながら、独自の解決策を作りだし、私たちが好きな仕事を当たり前に選ぶことのできるような世の中を作りあげたいものです。▼アメリカのサブプライムローン問題に端を発した世界同時株安など、世界経済が大波乱の今、非正規雇用者の首切りなどが大幅に進められ、大量のワーキングプアが生まれかねない状況にあるのです。

体育服装
クラブユニフォーム の御注文は
製造直納の
（株）水野繊維へ
名古屋市中川区西日置町二丁目15－17
TEL（052）331－3077
TEL（052）331－3127

すくーるフォト♪
スクールあるばむ
稲沢市祖父江町
石田写真館
0587-97-0059

計量器・OA機器
事務・学用品・書籍
紙徳商店
一宮市萩原町萩原
TEL 68－0034
69－4121
FAX 69－2466

森永牛乳
萩原販売店
一宮市萩原町萩原2141番地
TEL〈0586〉69－7241

こころ1つのsymphony

西高祭

今年の体育祭は天候が悪く途中で中断して、延期されてしまった。再開されたときには、多くのマスコットがぼろぼろの状態であった。だが、そんなことにもめげず、こころを1つにした競技や応援などが、熱く繰り広げられた。リーダー部門優勝は第Ⅵ群団、衣装、競技部門優勝、総合優勝は第Ⅴ群団という結果になった。

文化祭では、ゼミは昨年よりもテーマが多岐にわたって楽しめたが、出来映えは今ひとつの印象を受けた。例年のように食品は盛況で、ユニークなネーミングと元気なかけ声は、活気を感じさせた。優勝したクラスは食品が3の4、物品が3の2、バラエティが3の3、劇が3の6。ゼミは1年生が大健闘して1の2が優勝した。

タンザニアのODAを視察

人と人との信頼と努力を実感

2年2組　原　朋弘

今年の夏休み、日本のODAが実際どう使われているかを視察しに、タンザニアに行ってきた。ODAと聞いても、教科書で読んだ遠い世界のように思えるだろう。税金の無駄遣いだと言われることもあるし、物をあげるだけで現地の人に役立っていないと非難されることもある。しかし、僕が見た国際援助とは、「人と人との信頼と努力」で成り立っているものだった。

日本の援助のすごさを実感したのは、バンビ地区という田舎の集落に日本が井戸を掘り、各家庭の近くに水道を作った、という案件だ。以前この地区には、3キロ先に井戸があっただけだという。女性や子どもが水汲みのために1日6往復もしていたそうだ。今、家の前に水道ができたおかげで、女性は家事が楽になったっただけでなく経済的に余裕ができ、子どもはちゃんと学校に行けるようになり、衛生面も向上した。水があるだけで全ての生活が変わってくる。普段なにげなく使っている水の大切さを知った。

さらに感動したのは、村の人たちがこの水道のメンテナンスや掃除を自分たちだけの手で行っているということだ。大規模な事故がない限り、村の人たちだけでこの施設を維持していけるそうだ。生活の大きな改善と自立の両方ができていた日本の援助を、この時本当に誇らしく思った。

タンザニアで最も印象に残っているのは、出会った人たちの顔である。やってきたことに誇りを持っている日本の方の顔。夢と希望に溢れた孤児院の生徒の顔。援助を受けて自立することのできた人々の喜びと感謝の笑顔で一杯の市場の人の顔…。

そんなステキな顔を見られたのは、日本の援助が、現地のニーズに本当に合い、現地の人と一丸となって、発展のために取り組まれているからではないだろうか。だからこそ地元の人も全力で、自分たちの力で援助を生かしていこうとしているし、自然にこんないい顔が生まれてくるのだろう。

援助・開発に携わる人からは、数々の熱い思いが感じとれた。それは、人々の生活を第一に考え、常に何が必要なのかを考えているからだと思う。以前は誤解していたが、援助は決してものをポンと与えるものではなく、現地で人と人とが、考えて考えて行っていくものであった。考えを一方的に押し付けるようなことではなく、日本の方が現地に溶け込み、現地の人と一丸となってやっているものに思える。だからこそ細かいところにも数々の配慮がされていたし、本当に必要なものを援助できているのだろう。

日本の報道や広報では、橋やダムなどの大きな援助ばかりが前面に出ているが、実際は草の根無償資金協力（資金の少ない小規模だが生活に直結する援助）のような援助もされているということをもっと多くの人に知ってもらいたい。

日本の援助が、日本人が、遠いアフリカの一国で、笑顔や夢、希望を作っていることを。

※ODAとは「政府開発援助」のことで、税金の1・6%、1・3兆円が使われている。「貧困削減」「持続的成長」「地球規模問題への取り組み」「平和の構築」に重点を置いて、無償、有償、技術協力の援助を世界中で行っている。

MY SCHOOL DAYS

林　則治 先生

我が母校は愛知県立刈谷高等学校である。西三河にある刈谷市は「世界のトヨタ」発祥の地であり、徳川家康の母「於大の方（刈谷谷城主水野忠政の娘）が住んでいたことで有名である。

その刈谷高校に、東京オリンピックの年、昭和39年に入学した。戦後ベビーブームの第2期生であり、今「団塊の世代」と呼ばれている年代である。1クラス55人、10学級。1学年550人、3学年で約1500人の学校である。

校風は「質実剛健」。当然、いろいろな校則があった。髪型は丸坊主、帽子着用、鞄は指定カバン、靴は黒の短靴、喫茶店の入店禁止、純喫茶店は親と同伴などである。私が卒業した昭和42年度から、校則がいろいろな面で自由になった。これも運命だと思って諦めた。

校舎は平屋建てが原則の建物の中で、1カ所だけ2階があった。「職員室」である。私たちはそこへの階段を「13階段」と呼んでいた。呼び出されたら生きて帰れない（もちろん、冗談である）。

楽しかった思い出は、体育祭の応援団長をやったことである。もちろん声の大きさで団長になった。応援団長は、群団席を作って団員を応援の渦に巻き込むリーダーの役目を務めなければならない。まず考えたことは、群団席の形である。立体的になるようにして高さを持たせ、その後ろにベニヤで看板を作成し、絵を描くことにした。材木を注文し、組み立ての方法、材木の止め方などを教えてもらい、前日には群団席を作ることが出来た。応援の衣装は、学生服にはちまき、扇子、高下駄、笛。団員は紅白のポンポンを持っての応援である。

大きな声でエールをかけて、三三七拍子を中心に音頭をとった。応援団の仲間たちやクラスメイトが、大きな声で私たちの音頭に合わせて手拍子、足拍子、応援歌などを一体になって行ってくれ、「感謝」の気持ち一言であった。応援団長としては、「超、気持ちよかった」ことを憶えている。残念ながら群団は優勝は出来なかった。

体育祭の中心は競技である。応援は今の西高で行っている応援合戦ではなく、競技中に応援態度が採点された。種目は100m走、リレー、高跳び、幅跳び、砲丸投げ、学年種目には、騎馬戦、棒倒し、マスゲームがあり、競技中心の体育祭であった。

刈谷高校は、生徒の自主性（自浄能力）を信じて生徒会行事を任せていたと思う。失敗することも大切な人生勉強で、大切なのは同じ失敗をしないこと、どうしたら成功できるか試行錯誤し、成功にたどり着くことが大事だと教えていたのだ。

団長の仕事を行ったことで、種々なことを学んだ。「感謝」…仲間に、他人に。「努力」…必ず報われる。「喜び」…結果よりもプロセスが大切。人として進歩する。

我が刈谷高校は、県高（岡崎高校）に追いつけ追い越せの目標を掲げ、受験勉強に毎日追われていた。早朝0時限授業から平常6時間授業、そして補習7時間目、1日8時間授業の毎日であったが、苦になることはなかった。「目標」に向かって進む事が大切だった。

私の好きな先生は、諸戸先生と沼田先生であった。諸戸先生は数学を担当してくださり、低音で説得力のある話し方と理解しやすい説明で、先生の授業と補習は私にとって魅力的であった。沼田先生は英語の先生で、副担任、後に正担任になられ、発音が真似の出来ないくらい美しく快い授業であったと思う。

もっとも一番好きな科目は、もちろん体育であった。3年生の1年間はサッカーの授業で、体育委員をしていた私は体育準備室に授業の準備について指示を仰ぎに行き、先生に「何がやりたい？」と聞かれると、私は、もちろん全員がサッカーをやりたいといっていますと答えていた。「笛と襷を持って行け」で決まりであった。受験のことを忘れて楽しめた唯一の授業で、楽しい1年間の体育だった。

刈谷高校のサッカー部は、「刈谷の赤ダスキ」とその名を全国に轟かせ、全国高校選手権大会19回出場（準優勝2回、3位2回）、国民体育大会11回出場（優勝2回、3位1回）、高校総体6回出場（準優勝1回）の結果を残していた。私の高校時代、全国高校選手権大会の応援に、大阪の長居競技場へ行った。残念ながら敗退してしまったが、選手はよく戦ったと思う。

なぜ赤ダスキになったかというと、ユニホームが同じ色で分からないので、赤い襷をして試合をしたが、相手選手に襷を捕まれるので、服に縫ってしまったのだと聞いている。

また、イギリスのイートン校と交流をしている。サッカーの母国イングランドのチームとの交流試合に主審をやらせてもらったが、イートンの選手は必ずボールにプレーをする。一方、日本の選手は相手に向かってプレーをする。イートン選手は素晴らしいフェアプレーであった。スポーツを通して紳士教育をしている。紳士は反則をしないというスポーツの原点に触れた気がした。

この赤ダスキを見ると、懐かしの高校時代が蘇ってくる。元気がもらえるユニホームである。我が母校には、学業・進学・スポーツ・文化のすべての部門で、今後も発展してほしいと願っている。

元気がもらえた赤だすき

インハイで学んだものを僕らは決して忘れない

3年6組　平野達也

「僕たちはみんなの期待、西高そのものを背負って走る。」インハイ、仲間の届かなかった夢や無念も背負って走る。3人はベストラップ。僕は6位でバトンを受け、最初からかっ飛ばし、トップに出た。が、最後大失速をして終わった。いつものレースをしていたら…。これがどんな時でも僕の課題となった。でも、とてつもなく強い強豪校と競い合えたこと、そして自分たちがその一員であったことを今、誇りに思う。

僕たちは夢実現のために強い意志を持ち、厳しい練習にも全力で取り組んできた。「努力は素質を上回り、気力は実力を越える」…。今年スピード社の水着が話題となったが、どんなに足が速くなるスパイクを履いたとしても、努力、気力という「人間力」にはかなわない。僕たちはそれを立証できた。

努力の結果であるインハイの風景は決して忘れないが、これまでの道のりで得られたものは大きい。いつも周りの人たちから支えてもらっている。そして自分も知らないうちに誰かを支えている。1人じゃなかった。ウチの最高のメンバー八木君、鈴木君、大林君、競歩9位の大津さん、陸部の仲間、全国という大舞台に導いてくれた松井先生、家族、応援してくれた多くの人たちに心から感謝したい。そして僕たちにバトンを継いでくれた西高歴代リレメンと先輩達に。

本当にありがとうございました。

インターハイ出場メンバー
平野君、大林君、大津さん、鈴木君、八木君

スピーチ

3年3組　山ノ井優美香 さん

今思うと、私がクラスの皆と西高祭へ向けて頑張ってこれたのも、学校生活をめいいっぱい楽しんでいるのも、「教室の無秩序」というものを経験したからではないかと思います。

さて、皆さんは平和と聞いて一体何を思い浮かべるでしょうか。戦争のない世界、平等な社会、いつも買ってるポンデリングの値上がりに愚痴をこぼせること、平穏な毎日。今、皆さんの多くが毎日勉強勉強勉強とつらい思いをしながら、部活あるいは行事に熱中し、平和な学校生活を送っていることと思います。しかし5年前、私が中学生のとき2年5組の教室に入ると平和な学校生活とはほど遠い光景が広がっていました。

掲示物はビリビリ、チョークは粉々、給食は宙を飛び交う、消毒液で殺された金魚。どこで、何を間違えて、何があってそうなったのかはわかりません。ただ、誰もかもが、いやだ、どうにかしたい、という気持を日を重ねごとに失っていったのです。教室の無秩序はごくごく当たり前のことになってしまったのです。そして、私自身も、教室の無秩序という魔物にとりつかれた者のうちの1人でした。毎日毎日、なんとなく教室に入り、なんとなくさようなら。決して、自分のクラスがとりわけ荒れていることに気付かなかったわけではありません。荒れているという事実に気付いてはいたものの、それが私達にとっての普通でしたから、何も行動せずに終わってしまっていたのです。あの時はある種の自己中心的な考え方をしていたように思います。

山ノイズム

そんな中、あるとき先生が私にこんなことをおっしゃいました。「お前も大変だろうになあ。」私ははっとしました。先生は勘違いをしている。違う。私は荒れたクラスを立て直そうとしているのではない。私は、このクラスの無秩序を作り上げた者の1人に他ならないんだ。そのことがキッカケとなって私は変えようとしました。クラスではなく、自分の腐りかけてた根性を、変えようとしました。

まずはじめに、クラスの掲示物を自分でつくり始めました。教室であばれまわらないように花を生けたりもしました。しだいに友人たちは私に協力してくれるようになりました。しかし、そう簡単に変わるはずもなく、花びんは割れ、その後も多くの先生方にお世話になり続けました。いいクラスにしようなんてことを思ったわけではありません。けれども、きっと何かが変わるはず、と芥子粒のような希望を持ち続けました。しかしながら、私達の教室の無秩序は結局、結局、進級、そしてクラス替えをもってして終わりました。

キリスト教精神のもと、世界中で平和活動に従事したかのマザー＝テレサは次のように言っています。「愛という言葉の対義語は悲しみでもなく憎しみでもありません。それは、無関心です。」と。私の経験した教室の無秩序はまさに無関心の集合体でした。そして私は、自分の無関心という罪に気付いたからこそ、変えたい、変わりたい、と思うことができました。決して優秀とは言えなかったけれど、私に無関心のおそろしさをおしえてくれたあのクラスに、今となっては感謝さえ覚えます。

紛争、核、テロ、地球温暖化、様々な問題が混在する現代、皆さんの関心が必要とされているのではないでしょうか。西高生の、西高祭に関わる当事者としての関心と同様に、地球市民という当事者としての関心が必要とされているのではないでしょうか。関心がなくては行動も変化も起こらないのです。自分のたった1人の関心が、西高1000人の行動につながっていくことを期待しています。

激闘！「全日本高等学校パワーリフティング選手権大会inさいたま」に参加して

3年3組　加藤純介

第2試技を白（成功）1、赤（失敗）2で落として迎えたデッドリフト土壇場の第3試技。重量は195kg。挙がればベスト8決定、相手の失敗によっては6位入賞の可能性も残る。ただし失敗すれば12位まで転落。まさに背水だが、渾身の力でこれを引ききる。第2試技と感触はほとんど同じだったが…白2赤1。成功だ！しかしこの直後逆転試技に成功され、その時点で6位入賞の夢は断たれた。結果…8位。

「フルギア連中相手にベルト1本で戦って6位入賞する。」これが4月の愛知パワーで高校総体の出場権を得てからの目標だったが、残念ながら達成することはできなかった。しかしもう1つの目標、〝悔いの残らない魂の試技をする〟これは達成できたと言っていいと思う。

とは言うものの、この試合はゴールではない、むしろスタートとも言える。見据える先は世界‼目指せ世界大会！

最後に、応援してくれたたくさんの先生方、同級生のみんな、どうもありがとうございました！

西高の木⑪

ナンテン

寒くなってくると実が真っ赤に色づくナンテン。本校では本館の西北や中館の北側などに、数株が植えられている。

メギ科の常緑潅木である。梅雨のころ、目立たないが白黄色の花をつけ、その後緑色の実ができ種ができる。実ができにくい年があるが、開花時に雨が多かったりすると、受粉がうまくいかないためらしい。冬になると赤く熟す。

「難を転ずる」と縁起をかついで、正月の生花などにも使われる。つややかな実の赤さも晴れやかな印象を与えるのだろう。

赤飯などの上に葉を載せたりするのは、防腐効果があるからだという。

編集後記

▼今回の新聞づくりにあまり携わっていないので作った感想は言えませんが、読むと「今回も濃いなあ」と思います。次号は「串作」の担当なので、頑張りたいと思います。（あ）

▼今回、小さいですが、初めて記事を書かせて頂きました。拙い文章ですが、一生懸命書いたので読んで頂けたら幸いです。次の号も、頑張りたいと思います。（ま）

▼今回の西高新聞にはほとんど貢献していません。だけど、記事には裁判員制度など話題のものが多く、勉強になります。次回からは、記事作成に貢献したいです。（み）

▼今年の西高祭では、新聞部も昔のマイスクールデイズをまとめて発表しました（写真左）。好評だったようで嬉しく思います。新入部員も入ってくれて一安心です。（り）

新聞部員募集中！兼部OK！